

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 言語を手掛かりとしながら、文章の内容を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて、情報を的確に理解したり、より効果的な表現に向けて検討、工夫したりする力などを求める。近代以降の文章（論理的な文章や実用的な文章、文学的な文章）、古典（古文、漢文）を題材とし、言葉による記録、要約、説明、論述、話し合い等の言語活動を重視する。

問題の作成に当たっては、題材の意義や特質を生かした出題とするとともに、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 本文及び問6【資料】は、佐藤淳二「データ・リヴァイアサンの降臨 存在論的機械学のために」（山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史（編）『われわれはどんな「世界」を生きているのか 来るべき人文学のために』ナカニシヤ出版、2019年）より抜粋したものである。出題箇所では、現代の生のテクノロジーや生権力の下で情報化されデータ化されながら生活する人間のあり方と、そこに生じる人間の傷である「存在論的機械」を提示し、後半では分身やロボットを「存在論的機械」の喩えとしつつ、自己と不気味な他者の問題を論じている。情報化・データ化が進行する現代社会のシステムと、そこに不可避的に内包される人間という問題は、これからの社会を生きるうえで重要な視点であり、自らを取り巻く環境やシステム、人工知能という新たなテクノロジー、そしてそのなかでの自分自身というあり方を深く考える契機となるよう、問題を設定した。

問1の漢字問題は、全体の正答率はやや高めであったが、問いごとの正答率には学習到達度による違いも見られた。問2は、象徴的に使われている「ミツバチ」の労働を筆者がどのように価値づけているのかの理解を問う問題であり、正答率はやや低めであった。問3は、象徴として使われている「ミツバチ」や「アリ」と「現代人」とをどのように重ねているのかの理解を問う問題であり、正答率はやや高めであった。問4は、「分身のメタファー」についての理解を問う問題で、正答率はかなり低めであった。問5は、本文の表現の特徴についての理解を問う問題であり、正答率はやや低めであった。問6は、同じ著作から「人工知能」について述べた箇所を【資料】として提示した。(i)は、「人工知能」に関する筆者の考えについての理解を問う問題で、正答率はやや高め、(ii)は、全体の趣旨についての理解を問う問題で、正答率は高めであった。

第1問の得点率は昨年度の同テストと比べるとやや低めであった。本文の抽象度が高いため、各設問の難易度も結果的に高まったと分析している。

第2問 本文は宇野千代「巷の雑音」（1922年発表）による。同作は地方から上京して10年近くになる女性・お絹の苦しい生活を描いた短編である。出題箇所は明日の食事にも困るほどの貧窮のなか、故郷から弟の英二が急遽上京してくることになり、それを迎えるお絹の困惑が描かれる部分。後段では地方からの上京者を嘲笑・揶揄するような「都会」の人々の視線を「声」や「音」として捉えてタイトルとの呼応が見られる重要箇所である。お絹の置かれた苦しい境遇・状況を本文から正確に把握するとともに、それに応じて激しく上下動する彼女の心境、特に困惑と肉親への愛情とが心中に同居・交錯するさまを本文の展開に沿って読み取らせることをね

らいとした出題であった。

問1は、小説の読解に関わる語句について、辞書的な意味を踏まえつつ文脈上の意味を理解できるかを問うた。難易度としては（イ）がやややさしく、一方の（ア）がかなり難しいという結果となった。問2は、弟から届く手紙にお絹が何を見出しているのか、その文面以上に肉親からの手紙が彼女にとってもつ意味を、その感情とともに読み取らせる出題であったが、この問いは受験者にはやや難しいものであったか。問3は本文文脈の正確な読解を前提にして、このときのお絹の置かれたどのような状況が彼女の心境にいかにか反映しているのか、その相関を読み取らせる問題であった。おおむね平準程度の難易度となった。問4は停車場に集まる人々のあり方をお絹がどのように捉えているのかについて、「自働人形」という比喩が表す内容を通して読み取らせる設問であった。読解問題のなかではやや難易度が高かった。問5はお絹が抱く弟への理想や郷愁、また実際に弟を目の前にした際のギャップについて読み取らせる意図の設問であった。受験者の多くが内容を理解できていたものと思われる。問6は小説末尾において、駅を出て宿に向かうお絹と英二について、姉弟二人の心情を周囲との関係と合わせて読み取らせる出題であった。おおむね平準程度の難易度となった。問7は本文に用いられている表現の特徴を通して、本文をより深く理解することができるかを問う出題であった。正答選択肢を二つとも選ぶのは困難であった一方、いずれか一つを答えられた者は一定程度いたように見受けられる。

第3問 生活習慣に関わるデータや文章資料を集め、「午前中の調子を左右する要因」について文章にまとめるプロセスを問う学習活動を設定した。実用的な文章や図表の読み解きだけではなく、「書くこと」につながる力を問う設問にした。高校生の朝食ならびに仮眠に関するグラフ、朝食に関する文章と仮眠に関する文章、大学生に対して行ったという設定のインタビュー記事を資料として示した。作問に当たっては、複数資料の内容を批判的に検討するとともに、「書くこと」の活動の見通しをもつという学習過程を意識した。

問1・問2は、資料の情報を読み取る力及び、自分の文章に生かせる内容を考える力を問うた。問3は、新しく示された資料と既出の資料とを関連づけ、書く内容を構想する力を問うた。問4は、全ての資料の情報を関連づけながら、さらに必要な資料や活動を構想する力を問う問題として設定した。

第4問 素材文とした『正徹物語』は、室町期の歌人、正徹（1381～1459）が和歌について語ったことを、正徹の教えを受けた者がまとめた歌論書である。出題箇所は、連続した本文ではなく、初心者的心得や本歌取りの基本を説いた3段を取った。正徹が説く初心者的心得や中世歌論における本歌取りの重要性への理解を問うとともに、初心者は実直に数をこなすべきという現代にも通じる内容に共感し、古文を身近に感じてもらうことを意図した。

問1は、本文の読解に必要な単語の意味と語法の解釈について理解する力を問うた。問2は、文章Aと文章Bについて、正徹が説いた初心者的心得を正しく理解できているかを問うた。問3は、文章Cについて、今川了俊が語った師匠（撰政殿）とのエピソードを正しく理解できているかを問うた。問4は、生徒によるノート作成の言語活動を設定し、新たな素材として藤原定家の和歌2首とそれらの本歌を【資料】として掲げ、(i)で【資料】の和歌を手掛かりに文章Aでの本歌取りの説明内容の理解を、(ii)で【資料】の和歌の本歌取り技巧の理解と解釈とを問うた。

第5問 『論語』の「己に如かざる者を友とすること無かれ」という言葉に関する、宋の蘇軾（朱熹『論語或問』に引用されたもの）と明末清初の王夫之の見解が示された文章を題材とした。『論語』のこの句は、文字通りに解釈すると自分より優れた人物を友とすることができなくなっ

てしまうという問題があり、蘇軾は世の固陋なる者への戒めと解釈することにより、王夫之は性質の違いを重視することで「己に如かず」の解釈を転換することによって、この問題の解決を図っている。

各設問の出題意図と結果は次のとおりである。問1は、漢文の基礎的な語彙の語義と用法を文脈に即して理解できるかを問う問題で、標準的な正答率であった。問2は、基礎的な語彙の語義の理解を問う問題で、正答率はやや低めであった。問3は、基礎的な語彙の用法を文脈に即して理解できるかを問う問題、問4・問5は、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の文章の構成と内容をそれぞれ把握できているかを問う問題で、これらの問題は標準的な正答率であった。問6は、文脈に即して書き下すことができるかを問う問題で、正答率はやや低めであったが、昨年度・今年度の本試験での同類の問題と比して正答率は高かった。問7は、【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】の全体の論旨について理解できているかを問う問題で、標準的な正答率であった。

### 3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

第1問 本文は、言葉（キーワード）の意味するところが読み取りづらく、また、後半部分については抽象度が高いため、文章の内容を的確に読み取る力や思考力を確認するうえではやや課題のある素材文及び問題であったとの評価を受けた。分量、設問数については適切だが、一部の問いは受験者にとって難易度が高かったとの評価も見られた。設問に関しては、問4・問5において、選択肢の内容の抽象度を上げることの妥当性に対する指摘があり、加えて、問5については、評論文で表現を問うことの難しさについての指摘があった。問6については、本文及び【資料】の内容についての的確に読み取る力を問う適切な問題であったとの評価を得た一方、【資料】という新たな素材を用いてもなお筆者の課題意識が読み取りにくく、設問のあり方について留意することが必要との指摘があった。全体としては、設問リード文から解答すべき内容が想像しにくい設問が複数あり、問い方については引き続き検討が必要という指摘があった。また、本文の理解を深めるための時間の確保が必要との指摘があった。

素材文の選択、抽象度の高い部分の作問のあり方については、より工夫が必要であったと自己分析している。問6の【資料】については、「人工知能」という身近な用語が対象となっていることで、抽象度の高い本文を含めた論旨が捉えやすくなると考えたが、効果的に機能させることには課題が残った。

第2問 本問は弟の上京に伴うお絹の心情描写を中心に描いた文学的文章である。大正期はおろか昭和期ですら歴史的に大昔のように思いがちな近年の受験者世代に対して、表現史的には決してそうではなくそれらが現在と地続きであることを認識してもらおうという意図もあり、戦前期の女性作者による文章を選んだ。さらに内容的には今日でもあまねく通用するような等身大の女性主人公の心情表現、特に弟への愛情を中心に、自身の置かれた状況や自他に対する認識が劇的に揺れ動く部分を中心に抜粋した。素材文は比喻を交えた簡潔な文体で書かれており、出来事や場面の叙述を的確に読み取ることでお絹の心情の変化が捉えられるかなどを問う問題とした。

これに対し、1922年発表の本文を共通テストで出題すること自体には価値はあるが、注の量が多すぎるという指摘や、リード文で「おえい」に触れるならばそれに関する設問があってもよいという指摘、さらには、各小問に取り組むごとに本文の理解が深まるような設問構成であったか、などの指摘があった。注に関しては、現代の高校生の知識レベルを想定した結果として増えてしまったという面がある。受験者が読むうえでの所要時間による負担を考慮し本文自体を例年よりやや短めにするとともに、注も精選して全体で1ページに収まるようにはしたが、

従来の問題に比して注が目立ったのは確かである。また、「おえい」の認識・心情を問う設問については、本文において彼女の登場箇所が少なく、また本文全体があくまでお絹の視点を中心とした叙述であることから、それを正面から問うことは難しいと判断した。しかし、設問が一本調子になることを避ける意図から、お絹の心境を踏まえつつも設問として表現面を問うものを挿入するなどの対応も試みた。設問構成については、全体的には順に設問に取り組むことで本文に対する理解が深まるようにしたつもりであるが、問の排列という面では再考の余地があったかもしれない。

他には、本文に出てくる語句の意味について問うた問1に対して、出題の趣旨はよいが選択肢の内容にやや課題があったとの指摘があった。問2以降の本文の内容理解を問う問題に関してはおおむね適切、読解に関わる重要な比喻表現について問うた問4などは良問との評価意見を受けた。一方で、大問及び小問のリード文の精査・工夫が必要だったとの見解も寄せられた。

第3問 学習指導要領の「書くこと」の学習過程に即して、情報の妥当性を吟味する力や、書くようとする文章の内容や論理の展開を検討する力等を測る素材文及び問題であったという評価を得た。他方、作問者が設定した思考の過程を追い続けなければならないため、解答するまでの作業が複雑化する面があるとともに、問4における【メモ】は、全体として一貫性のある自然な仕上がりに見えるような工夫が必要だったという旨の指摘があった。各設問を質の高い問題として成立させることと、設定する学習活動に適切かつ自然な流れをもたせることは、大問の中で両立させる必要があるだろう。また、冒頭に示したグラフについては、「よくある」等の言葉が複数の箇所を示しており、問1の選択肢にもその文言を引用しているため、受験者が戸惑う可能性があるという指摘もあった。

第4問 リード文や注を参考にして古文を的確に読み取る力や、本文に関連する【資料】を踏まえて本文の解釈を深める力等を確認するうえで適切な素材文であったとの評価を得た。また、問4は、我が国の言語文化に特徴的な技法である本歌取りを題材に、具体的な言語活動を想定し、題材の意義や特質を生かした出題である点が評価された。加えて、多角的な視点から解釈する力を測ることができる良問であり、高等学校における授業改善に向けて示唆に富むものであったという評価も得られた。その一方で、複数テキストを提示した際の設問が類似の傾向になっている点は一考の余地があるとの意見もあった。複数テキストは本文の深い理解を促すために提示するものであるという前提を守りつつ、その扱い方のバリエーションについては今後も試行錯誤していく必要があるだろう。

なお、第4問の得点率はおおむね適切に分布していた。本文がやや平易で、本歌取りの知識をもつ受験者にとってはやさしかったとの指摘もあったものの、全体の難易度は問4で調整されていたと評価されたとおおり、概して識別力の高い設問であったと言える。

第5問 本文の分量は妥当であるが、抽象的な内容で読みづらいという評価と、読みやすいという評価と両方あった。しかし、内容の理解のためには深い思考力を要する題材とも評価されており、高等学校での学習成果を測るために妥当な範囲であったと考える。設問の難易度はやや低いとの評価もあったが、他の大問とのバランスや、全体の得点率はおおむね標準的であったことから、妥当であったと言える。設問は、語句の問題が句法・語彙の知識だけで解けてしまう問いがあるとの評価があり、本文の内容理解とより関連づけた設問を検討する余地があった。全体としては、本文の展開に沿って問うべき内容を問う、妥当な設問であった。

#### 4 まとめ

第1問 本問では、抽象度の高い論理的な文章を段階的に読解する能力を問うことを基本とした

が、素材文については、本文のみで示しうる筆者の意図について若干の課題があり、出題内容については各問の問い方や選択肢の内容等にやや課題があった。難易度は、問4・5については高くなったものの、全体としてはおおむね適切であったと考える。筆者の意図を読み取るための【資料】が補助資料として効果的に活用しきれなかったことをはじめ、指摘を受けた諸課題については、受験者の思考力を的確に問えるよう、解決に向けて方法等をより工夫する必要がある。今後も受験者の学習過程を意識した良問の作成に努めたい。

第2問 受験者に読ませたい素材の選定、その文章に特徴的な表現をきちんと読み取らせたうえで内容読解を問うという点ではおおむね適切な出題であったと言える。現代の受験者の生活知識レベルを想定すると、戦前の文章ではどうしても注が多くならざるを得ないが、当初からそれを理由にそうしたものを忌避するのもよくないと思われ、今後は全体のバランスのなかで考えていきたい。全体を通しての設問の難易度は適切な水準であったと思われる。語彙問題に関しては「言語文化」の指導目標に鑑みて今後も出題を慎重に検討することとしたい。また受験者が過不足なく内容を捉えられるような本文リード文のあり方、設問における傍線箇所とリード文の示し方については、今回の指摘を受けてより適切な形に近づくように心掛けていきたい。

第3問 複数の資料の内容を批判的に検討し、書こうとする文章の見通しをもつという「書くこと」の学習活動の序盤の場面を設定し、その学習活動の中で必要となる力を測る問いを作成し出題した。出題内容としてはおおむね適切で、設定した場面や学習活動については一定の評価を得たが、そのような設定の影響もあって、作問上留意しなければならない今後に向けての課題がいくつか浮き彫りとなった。今後もさまざまな工夫を取り入れながら、実用的な文章を素材とした本大問の出題内容がより一層充実するよう努力を重ねていきたい。

第4問 古文単語や文法事項といった基礎的な知識を問う設問、文脈を踏まえて内容を問う設問、【資料】の和歌を踏まえて本文の一層の理解を問う設問などにより、古文を的確に読み取る力を確認できる出題となったと考える。

一方で、本試験との難易度のバランスの面では課題が残った。大問全体ないしは大問間のバランスを考慮に入れつつ、選択肢や設問数の設定や出題方法の工夫などで難易度の調整ができるよう引き続き心がけたい。また、今後も多様な素材を吟味し、古文の特質や魅力を伝えながら受験者の学力を適切に測る作問を目指して努力を続けていきたい。

第5問 本問は、高等学校で学ぶ漢文の基礎的語彙・句法の理解や論理的読解力・思考力を測るという出題意図を適切に反映しえたもので、『言語文化』において他の作品などとの関係を踏まえて解釈を深める指導の充実に資するもの』との評価を得たことから、共通テストの出題として妥当なものであった。一方、語句・句法の問題は安直なものとならないよう留意する必要がある。また、言語活動を重視した形式の採用については、素材文の内容・性質との兼ね合いや設問としての必然性、受験者への負荷の程度や他の大問とのバランス等を考慮しながら、引き続き積極的に検討したい。